

歴史の中のシシィ / エリーザベト¹⁾

上 村 敏 郎

はじめに

2022年、日本でも人気のミヒャエル・クンツェのミュージカル作品『エリザベト』がウィーン初演から30周年を迎えた。本特集では、三つの観点、歴史、映画、演劇という視点からエリーザベト²⁾の虚像と実像に焦点を当てることになるが、本稿では歴史学の観点から歴史の中でシシィのイメージがどのように構成されてきたかという話を中心にしていきたい。最初にまず皇妃エリーザベトとはどのような人物だったのか、ハプスブルク君主国史とも絡めながら、少し紹介する。次に歴史学研究の中でエリーザベト研究が盛んではないのはなぜか、エリーザベト研究の難しさを説明する。そして後半で「歴史の中のシシィ / エリーザベト」ということで、実際にどのようなイメージが歴史の中で形作られていったのかという話を二つの事例、すなわち、美しい王妃というイメージとハンガリーとの関係性に焦点を当てて論じる。

1) 本稿は、2022年8月6日に開催された市民向けの獨協大学オープンカレッジ特別講座「オーストリア皇妃エリーザベト：歴史・映画・演劇の中の虚像と実像」の中でおこなった講演の内容に一部加筆修正したものである。オープンカレッジの中では時間の都合上割愛した部分に関しても原稿化している。

2) 本稿では、一般的に普及しているミュージカル作品での日本語呼称「エリザベト」ではなく、史実を扱うということをふまえて正しいドイツ語イントネーションである「エリーザベト」という表記を用いる。ただし、作品の中の登場人物を指す場合は「エリザベト」を用いる。

1. 皇妃エリーザベト（1837-1898）とは

まず、ハプスブルク君主国の歴史を概観しよう³⁾。この国は19世紀になってオーストリア帝国、1867年のアウスグライヒ以降、オーストリア＝ハンガリー二重君主国として知られる巨大な帝国である。この帝国は、現在のオーストリア、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、ポーランドの一部、ウクライナの西側、ルーマニアの一部、バルカン半島の国々（クロアチア、スロベニアなど）を含む広大な地域を支配していた。帝国の民族構成は多様で、ドイツ人、ハンガリー人、チェコ人、スロヴァキア人、ポーランド人、ウクライナ人（ルシン人）、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人、ボスニア人、ルーマニア人、イタリア人などが含まれており、文字通り多民族帝国だった。

19世紀後半、この多民族帝国は三つの主要な圧力に直面していた。第一に、西欧の列強による帝国主義の拡張戦略である。この時代、植民地支配をめぐる列強間の競争が激化し、帝国主義に乗り遅れると国家は大国の地位を失う危険があった。第二に、リベラリズムの台頭がある。身分制社会に対する反発として、政治的権利の拡大、平等な権利の要求、憲法の制定などを目指す動きに対応する必要があった。第三に、ナショナリズムの問題がある。これは、民族の権利を拡大しようという動きであり、ハプスブルク君主国の歴史にも大きな衝撃を与えたドイツとイタリアの統一は、ナショナリズム運動の結果として生まれたものである。このような国民国家の理念は、多民族国家にとって解体の危険をもたらした。ハプスブルク君主国内の民族は、必ずしも独立した国民国家を形成しようとしたわけではないが、国内での民族の権利の拡大や自治権の獲得に向けて運動を展開した。こうした三つの動きにどのように対処するのか

3) 19世紀後半のハプスブルク君主国の歴史を概観するためには以下の文献が参考になる。岩崎周一（2017）『ハプスブルク帝国』講談社。スティーヴン・ベラー（2001）『フランツ・ヨーゼフとハプスブルク帝国』坂井榮八郎監訳、川瀬美保訳、刀水書房。ロビン・オーキー（2010）『ハプスブルク君主国 1765-1918』山之内克子・秋山晋吾監訳、三方洋子訳、NTT出版。



図1 エリーザベト年譜(筆者作成)

が、ハプスブルク君主国の主要な課題となっていた。

エリーザベトが生きていた時代には1848年革命、クリミア戦争、イタリア戦争、ドイツ戦争、ベルリン会議、バデーニ危機など大きな出来事がたくさん生じている。これは先に挙げた三つの力が作用した結果である。こうした時代背景をふまえ、エリーザベトの生涯を概観すると、大きく五つの時期に分けて考えられる⁴⁾。第1期(1837-1854)は生誕からフランツ＝ヨーゼフとの結婚までの期間である。エリーザベトは1837年にバイエルンで生まれ、ポツェンホーフェンで楽しい幼年期を過ごした。父マックス公爵は、音楽や旅行、サーカスをこよなく愛し、エリーザベトにもこうした趣味は受け継がれている。その後

4) エリーザベトの人生については主に次の文献を参考にした。

ブリギッテ・ハーマン(2005)『エリザベト：美しき皇妃の伝説(朝日文庫)』上下巻、中村康之訳、朝日新聞社、M. シェーファー(2000)『エリザベト：栄光と悲劇』大津留厚監訳、永島とも子訳、刀水書房、Brigitte Hamann(1997, Erstausgabe 1981), *Elisabeth: Kaiserin wider Willen*, Überarbeitete Neuauflage, Amalthea Signum Verlag; Michaela und Karl Vocelka(2014), *Sisi: Leben und Legende einer Kaiserin*, München: Verlag C.H.Beck.

16歳でオーストリア皇帝フランツ＝ヨーゼフと結婚した。この結婚が彼女の人生に大きな影響を与えたことは言うまでもない。第2期はエンターテインメント作品で描かれることも多い窮屈な宮廷生活の時代(1854-1863)である。結婚後のエリーザベトはウィーン宮廷での生活に慣れるのに苦労し、適応障害のような症状を発症し、療養でウィーンを離れることが多くなっていく。第3期は、ハンガリー語を学びはじめ、ハンガリー女王としての役割を果たそうとしたハンガリー王妃の時代(1863-1872)である。エリーザベトはハンガリーへの旅行を通じて、ハンガリーと密接に関わるようになる。1867年の戴冠式、オーストリアとハンガリーとのアウスグライヒの締結は、エリーザベトが政治の表舞台にでてくる重要な時期である。ただ、1872年には政治的活動が少なくなり、趣味の乗馬や狩猟、美容に興じるようになる。同年、たびたび衝突していた義母ゾフィーが亡くなったことも彼女に自由を与えたのかもしれない。この時期から始まるのが第4期の自由気ままな時代(1872-1889)である。そして、次の画期は1889年の皇太子ルードルフの自殺である。これはエリーザベトにとって大きな精神的ショックを与え、その後の人生にも少なからず影響を与えたと考えられる。彼女はスイスで暗殺されるまで、放浪の旅を続けた。これを第5期のオッデュッセイア時代(1889-1898)としよう。

ここで皇妃エリーザベトに対する一般的な歴史学の評価について紹介したい。岩崎周一は彼女に対して少々厳しめの評価をしている。

「シシィ」の愛称で知られる皇妃エリーザベトは、ミュージカルや映画などにより、ある意味では今日もっともハプスブルク家の中でポピュラーな存在だろう。彼女は結婚後間もなく、今日ならば適応障害と診断されるであろう状態に陥って、公務を厭うようになった。やがて彼女は各地を放浪し、美に執着し、奇行を繰り返すようになる。そのため、初めはその美貌とも相まって集めることのできた声望も、後年には大きく減退した。彼女について優れた伝記を著したブリギッテ・ハーマンは、「私生活に引きこもり、詩作にふけり、ついには孤独に逃げ込む——それがエリーザベト

の出した答えだった」と結論づけている。

エリーザベトは自由主義に共鳴して共和制を君主制より評価し、ハプスブルク君主国を「過去の栄光の骸骨」と蔑んでいた。しかし、地位にともなう特権や富力は存分に享受し、奇行の費用を夫に賄わせる一方、国の崩壊に備えて私財をひそかにスイスに備蓄し、投資で利益を上げていた（彼女の死後、家族は遺産の額の大きさに驚くことになる）。彼女が旅先で暴漢に刺され横死を遂げたとき（1898年）、人々はその死を悲しむより、弟、息子に続いて妻を悲劇的な形で失った皇帝に同情を寄せた⁵⁾。

現在、通常の歴史家が評価すれば多かれ少なかれこのような評価になってしまうと思われる。他にロビン・オーキーが「エリーザベトは美しい女性に成長して彼に愛されたが、神経が不安定で衝き動かされるように旅を繰り返していたため別居が長くなった」とエリーザベトの美しさと不安定さに言及している⁶⁾。岩崎やオーキーはエリーザベトに触れているが、そもそもハプスブルク君主国を扱う通史の中ではエリーザベトに言及しているものは少ない。例えば、ステイヴン・ベラーによるエリーザベトの夫フランツ＝ヨーゼフの伝記研究において妻であるエリーザベトは登場しない⁷⁾。こうしたことから考えると、歴史学は、伝記研究を除き、エリーザベトを歴史の中に位置づけたり、正面から扱ったりはしてこなかったと判断できる。

2. エリーザベト研究の難しさ

どうしてエリーザベトが研究されてこなかったのか、エリーザベト研究の難しさについて考えてみよう。一つ大きな問題は利用できる現存史料が極めて少ないことである。例えば、エリーザベト自身が死後破棄するよう命じた手紙な

5) 岩崎 (2017)、pp. 303-304.

6) オーキー (2010)、p. 311.

7) ベラー (2001)

どは、重要な内容を含んでいたと思われるが、大部分が失われている。これにより、歴史家が重要な情報を明らかにすることが困難になっている。また、現存する史料の多くが現在はハプスブルク家の個人所有となっており、アクセスが制限されている。かつては一部の史料が公開されていたものの、現在は閲覧が難しくなっている。また、エリーザベトは1886年から1890年に書いた詩を集めた『詩日記』を残している。この史料は彼女の個人的な感情や思考を反映していると考えられるが、その内容をどのように解釈するかは歴史家にとっての課題となる。さらに、かろうじてアクセスできる残された記録は主観的な内容である。これらのエゴドキュメントは、それぞれの人物による主観的な視点から書かれているため、こうした記録をどのように評価するかが重要である。また、女性の歴史に対する注目が低かった過去の影響も、エリーザベト研究の難しさに一因となっている。ジェンダー研究が盛んになるまでは、女性の役割、特に王妃や皇帝の配偶者が重要な存在として見なされていなかった⁸⁾。

このような史料状況の中で、エリーザベトについて知る際に未だに参照すべき伝記研究が二つ存在する。一つ目は、1934年にエゴン・ツェーザー・コルティ伯爵によって書かれた「エリーザベト：不思議な女性」である。この伝記は、形式的には読みやすさを目指した小説的な形をとっているが、現在は参照できないものも含む一次史料に基づいて書かれたものである。用心深く読む必要があるが、現在アクセスできない史料も補完できるという点では今でも重要な文献である⁹⁾。また、1981年にブリキッテ・ハーマンが出版した伝記も40年以上経った今でも基本文献であり続けている。ハーマンの伝記は、コルティ伯爵のものと同重なるところも多いが、エリーザベトの『詩日記』を含む新しい史料を使用し、実像に迫る描写に成功している。

これらの伝記は、エリーザベトのイメージを形成し、後のフィクション作品

8) Vocolka (2014), pp. 7–9.

9) Egon Caesar Conte Corti (1998⁴⁾), *Elisabeth. Die seltsame Frau: Nach dem schriftlichen Nachlaß der Kaiserin, den Tagebüchern ihrer Tochter und sonstigen unveröffentlichten Tagebücher und Dokumenten*, Verlag Styria, (Original. Salzburg 1934). この伝記についての詳しい情報は本書のヴォツェルカによる解説を参照のこと。

に影響を与えている。1950年代のロミー・シュナイダーが主演を務めた『シシィ』三部作は、実像とはかけ離れたおとぎ話の中のお姫様としてのイメージを強化した。こうした実像とかけ離れたエリーザベト像は、1972年のヴィスコンティ監督の映画『ルートヴィヒ2世』で少し修正された。そして、エリーザベトのイメージ変化において近年最も大きな影響力を持つのは1992年初演のミヒャエル・クンツェのミュージカル「エリザベト」である。その脚本は、ハーマンの伝記の情報に基づいて書かれたものであり、史実に一定の配慮をしている作品となっている¹⁰⁾。

3. 歴史の中のシシィ / エリーザベト

(1) 「美しい」シシィのイメージ——フィクションを生み出す歴史の中のシシィ像

第一のテーマとして、美しいシシィのイメージ、歴史が生み出したフィクションのシシィ像について扱う。フランツ＝ヨーゼフとエリーザベトが森を散歩する様子が版画のスケッチのように描かれている(図2)。これは1898年に降に描かれたものとされている。つまり、シシィが死んだ後の想像で描かれたものである。拡大してみると、フランツ＝ヨーゼフは老齢に見えるが、シシィは若く見え、夫婦というより親子のようにさえ見える。実際には二人の年齢差は7歳であるが、図像ではそれ以上に離れて見える。

図3は、38歳のエリーザベトがウィーンのシェーンラテルンガッセにある民衆食堂¹¹⁾(Volksküche)を慰問しているところを描いている。また、クンツェのミュージカル作品では、精神病院を慰問するシーンがあるが、それと同様の様子で描かれている。先ほどの図2で描かれているエリーザベトとほとんど変わらぬ外見である。1898年、シシィの死後に発行された号外やオーストリア

10) Vocelka (2014), pp. 120-121.

11) これは現代の日本の子ども食堂のような、無料で食事を提供する福祉施設と考えられる。



図 2 Wilhelm Gause, *Kaiser Franz Joseph und Kaiserin Elisabeth beim Waldspaziergang*, nach 1898, Wien Museum Inv.-Nr. 238691, CC0
(<https://sammlung.wienmuseum.at/objekt/1034765/>)



図 3 August Heinrich Mansfeld, *Besuch der Kaiserin Elisabeth in der Volksküche in der Schönlaterngasse* (1875)
(https://www.altertuemliches.at/files/experiment_metropole_1873_pressefoto_08.jpg)

の挿絵新聞では、彼女の様々なイラストが載っている。これらも61歳の彼女を実年齢よりも若く描いている。実際の年齢とは異なり、「シシィ」はある時から一切年を取らないように見える。美しい皇妃シシィのイメージは、彼女の死後も様々な形で使われ続けた。

そもそもエリーザベトは美しかったのか。美しいシシィ像も歴史的に構築されていったものなのだろうか。シシィの美しさがはっきりと認識されはじめたのは、三人の子を産んだあとのことだとされている¹²⁾。何人かの外交官がエリーザベトの美貌に触れている。例えば、アメリカ大使ジョン・ロスロップ・モトリーは1864年3月16日に母に宛ててエリーザベトの美貌を讃える手紙を送っている。

すでに何回かお伝えした通り、皇妃は美の奇跡です。背が高く、美しい体つきをしており、豊かな薄茶色の髪、ギリシア風の平たい額、優しげな瞳、真っ赤な唇、甘い微笑み、低く音楽のような声、時にははにかみつつ、時にはとても優美な振る舞いを兼ね備えています。彼女は私になりえることのない、もっと優れた宮廷詩人に値する人です¹³⁾。

また、プロイセンの元帥モルトケ伯爵も1865年1月16日に妻に宛ててエリーザベトを讃える手紙を送っている。

皇妃が[プロイセン]王子[フリードリヒ・カール]と一緒に出てきたとき、私たちは紹介されました。噂が過大に伝えられていたわけではなく、皇妃陛下はかわいらしく、美しいというよりさらに魅力的で、独特で、その魅力を表現するのは難しいです。喪中のため、レース付きの豊かなストライプの生地、2エルのトレーンのある装身具なしの黒い衣装でした。

12) Vocolka (2014), S. 65.

13) George William Curtis(ed.) (1889), *The Correspondence of John Lothrop Motley*, vol. 2, London, pp. 153-154. cf. Vocolka (2014), S. 65.

彼女は少し内気なようで、声は小さく、決して聞き取りやすいとは言えませんが、彼女の言うことは何とはなしに心地よさを感じます¹⁴⁾。

どちらの手紙も肉親に宛てた手紙であり、ある程度本音を語っているものだろう。こうした証言はエリーザベトの美貌が後世のイメージであるだけでなく、当時の人々の目にもそう映っていたことを表している。しかし、20代後半から30代の頃の美貌のイメージが持続し、なぜ年を取らないように見えるのかという疑問は残る。これについては、彼女の姪、マリー＝ルイーゼ・ラリッシュ＝ヴァーラーゼーが書いた『皇妃エリーザベトと私』という本が参考になる。1935年に出版されたこの本には、エリーザベトの見た目に関する記述がある。

例えば、皇妃はいつも美しさを保つことを気にかけていて、老いることを考えると、絶えず不安に駆られていらっしゃいました。そのことについて、彼女自身が日記に書いています。「老いを感じたらすぐに、私は完全に世間から身を引くつもりです。だんだんとミイラになっていくことほど『恐ろしい』ことはありませんし、若い自分に別れを告げることを望まないこともです。その後、化粧を施した仮面のように歩き回るようになったら……嫌だわ！多分、私は後になって常にベールを被って歩いていて、もう身近な人にさえ顔を見せないはずです。ハガードの本『彼女』(She)の中でやっていたように。いつも適切なときに姿を消すことができないといけません」¹⁵⁾。

14) Graf Helmut von Moltke (1892) *Gesammelte Schriften und Denkwürdigkeiten des General-Feldmarschalls Grafen Helmuth von Moltke*, 6 Bd. Berlin, S. 435. cf. Vocelka (2014), S. 66.

15) Marie Louise von Wallersee (1935), *Kaiserin Elisabeth und ich*, Leipzig, S. 45. ただし、ヴァーラーゼーの本は暴露本的な色彩が強く、その記述の信憑性は必ずしも高いものではなく、脚色の可能性は否定できない。だが、記述すべてが虚構であるとも言い難い。エリーザベトの行動と照らし合わせると、老いに恐れを抱くことに関しては、違和感のない記述であると考えられる。

マリー＝ルイーゼが引いたエリーザベトの日記を見る限り、彼女はひどく老いを恐れ、また老いた姿を見られることを恐れた。1868年のハンガリー王妃戴冠式の時の美しい写真が残っているが、この年、すなわち32歳以降、エリーザベトは自らの写真を撮らせることはなかった。その後に出た写真は、パパラッチによるものを除けば、古い写真を使ったモンタージュだった¹⁶⁾。

老いた姿を見られることへの忌避は、普通のことだったのだろうか。そこで、他の上流女性の例をみると、イギリスのヴィクトリア女王には、24歳の頃のヴィンターハルターによる絵画と63歳頃の写真が残っている。同様に、ウィーン宮廷の人気を博したパウリーネ・メッテルニヒ夫人には、24歳頃の絵画と64歳の写真が残っている。エリーザベトと美を競い合ったといわれるナポレオン3世の妻ウジェニーも31歳の絵画と54歳の写真があり、同じである。みな、年相応の姿を後世に残している。エリーザベトの老いへの恐れは、一般的な王族女性のあり方とは一致しないものだったといえよう。

年老いてからは人前に入るような公務を避けていたこともあり、老いたエリーザベトの現実の姿は残らず、それがゆえにイメージの中の「シシィ」は年を取らなかった。世代が変わり老いた姿を覚えている人がいなくなると、イメージは若いままで、1860年代に止まってしまう。晩年のイメージの不在がエリーザベトの不老化につながり、永遠に美しい存在へと昇華したのだと考えられる。

16) Vocelka (2014), S. 73-74. エリーザベトの写真の多くは現在の芸能人のものと同じく加工されたものだった。Alice Freifeld (2007), 'Empress Elisabeth as Hungarian Queen. The Uses of Celebrity Monarchism', in: Laurence Cole, Daniel Unowsky(ed.), *The Limits of Loyalty: Imperial Symbolism, Popular Allegiances, and State Patriotism in the Late Habsburg Monarchy*, New York/Oxford, p. 139.



図4 ハンガリー王妃としてのエリーザベトの写真

(https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Erzsebet_kiralyne_photo_Rabending.jpg)

(2) ハンガリー王妃とアウスグライヒ

エリーザベトが政治的に影響力を行使したと考えられる最大の出来事は、オーストリア＝ハンガリー二重君主国の成立のきっかけとなったアウスグライヒ¹⁷⁾の締結であり、これはハプスブルクの歴史にとっても重要な出来事であった。エリーザベトの伝記や一般書はアウスグライヒ締結をエリーザベトの

17) イタリアの独立、ドイツ（普墺）戦争での劣勢の中で、ハンガリーではフェレンツ・デアークら自由主義者の下でハンガリーの国民国家建設の動きが生じていた。ただ、デアークはロシアとドイツ帝国の間に挟まれることになるハンガリーは独立よりもハプスブルク君主国の中に留まることが有益だと考えた。こうした考えのもとでハンガリー側がオーストリア側との交渉の末、1867年に締結されたものが「妥協」とも訳されるアウスグライヒである。この結果、ハンガリーは大幅な自治権を獲得し、オーストリア＝ハンガリー二重君主国が成立した。Helmut Rumpler (1997), *Eine Chance für Mitteleuropa: Bürgerliche Emanzipation und Staatsverfall in der Habsburgermonarchie*, Wien, S. 405-410.

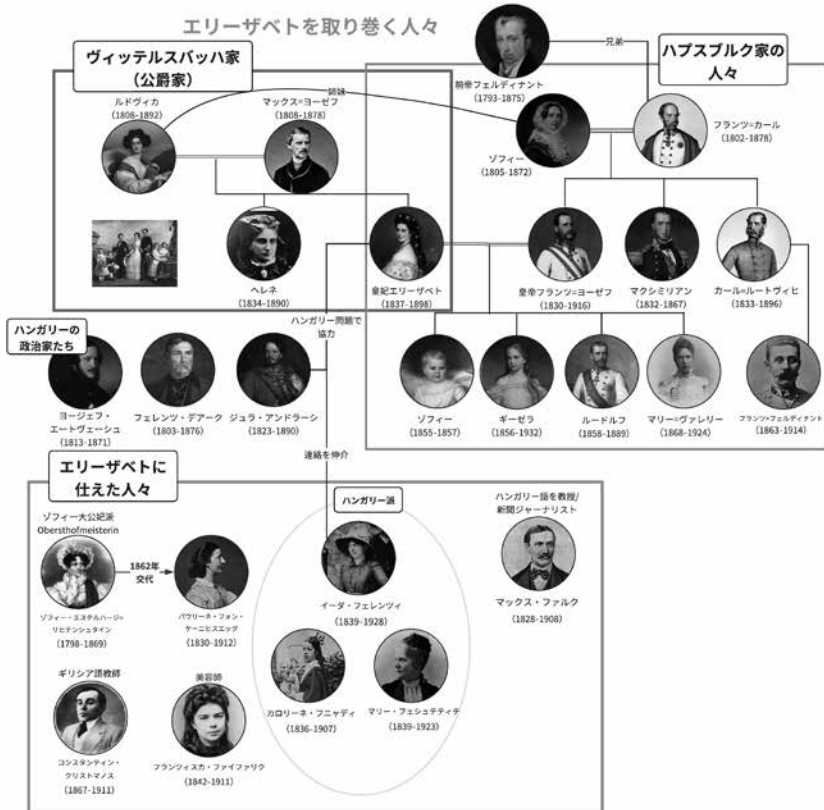


図 5 相関図

エリーザベトを取り巻く人々 (筆者作成) 画像出典は Wikipedia

功績のように語るものも多い¹⁸⁾。エリーザベトの死直後にすでに彼女とアウス

18) ベアトリクス・マイヤーによると、「アウスグライヒに関する学術文献や史料を調べてみると、エリーザベトの名前に会うことは極めて稀で、通常は傍注としてしか登場せず、原則として言及されることすらない。[...] エリーザベトの伝記においてのみ、オーストリア＝ハンガリー皇妃は非常に重要であり、決定的であるとさえされる。ここでも、[伝記の] 著者たちはエリーザベトの行動を示す史料を何も挙げず、彼女の振るまいと狂信的なハンガリー愛を論証し、そこから結論を導き出している」。Beatrix Meyer (2019), *Kaiserin Elisabeth und ihr Ungarn*, München, S. 146-147.

グライヒの結びつきの強固さを指摘する歴史家がいた。例えば、ハンガリー人歴史家サーンドル・マールキは王妃暗殺の翌年に出版された『ハンガリー王妃エリーザベト 1867-1898』の中で次のように叙述する。

常に疑念を抱く歴史叙述は、文書に基づいてアウスグライヒの歴史を語ることだろう。その歴史叙述は歴史的必然性、出来事の論理、状況に対する日和見主義、関係した政治家たち（その中に文書に基づいて王妃の名を見つけ出すことは難しい）について報告することになる。しかし、他の問題で歴史叙述にすでに十分に起きてきたことがここでも起こるだろう。その歴史叙述は国王と国民をつなぐ糸を紡いだのは実際には王妃の繊細な手だったのだという確信を世間の意識から拭い去ることはできないだろう¹⁹⁾。

史料に依拠する歴史学と一般に広まっていたイメージは死後直後から乖離していたと考えることができるだろう。そもそも交渉過程に関してエリーザベトが何か関与していたとしてもその史料が残っていないため、歴史学では実証することは不可能である。そうした制約もあるが、ここではアウスグライヒにおけるエリーザベトの影響力について考察したい。

エリーザベトがハンガリーとの接触を密にしていく大きなきっかけを作った人物の一人は1864年にエリーザベトの女官に加わったイーダ・フェレンツイである²⁰⁾。フェレンツイは側近としてまた友人としてエリーザベトに影響を与え続けた。そして、ここで重要なことは彼女がエリーザベトとフェレンツ・デアークとの接触のきっかけを作った可能性があるといわれていることである²¹⁾。さらにエリーザベトは、1866年1月にジュラ・アンドラーシと出会い、

19) Meyer (2019), S. 171.

20) フェレンツイについては、ハーマン (2005)、上、pp. 284-288, Vocelka (2014), S. 52を参照のこと。

21) Vocelka (2014), S. 52-53. ハーマン (2005)、上、pp. 288-289.

ハンガリーの政治家との交流を開始した²²⁾。この後、エリーザベトはハンガリー側に肩入れするようになり、夫に対して政治的圧力をかけるようになる。1866年6月にドイツ(普墺)戦争が始まり、7月3日にケーニヒスグレーツの戦いでオーストリア軍が敗北をすると、エリーザベトは子供を連れて緊迫した状況にあったハンガリーのブダに避難し、夫である皇帝に毎日のように手紙を書き、アンドラーシやデアークと皇帝の間を仲介した²³⁾。1866年7月15日に、皇帝にアンドラーシと面会し、ハンガリー問題について話し合うように手紙を書いている。皇帝はこの要求に屈し、7月17日にアンドラーシと謁見した²⁴⁾。これをもってエリーザベトに決定的な影響力があったと解釈するのは早計である。皇帝はあくまで謁見をおこなっただけであり、この時点でアンドラーシを信用していなかったからである。皇帝の主要な交渉相手はアンドラーシではなく、デアークだった。1865年からデアークとは書簡を通じてハンガリー問題に関する協議がおこなわれており、プロイセンとの戦争中に交渉は一時中断され、戦争終了後、再開された。

エリーザベトとデアークに直接的な関係があったのかどうか、史料的には検証できない。エリーザベトの伝記を書いたコルティ伯爵は、ハンガリー語ができなかったため、サーリ・ヤードキニマドチャーニという女性にハンガリー語の史料の調査を依頼した。その結果、彼女は調査の難航についてコルティ伯爵に手紙で知らせた。

親愛なるエゴン伯爵、私はあなたに最初の研究成果をお送りしますが、本当に乏しいものです。[...] デアークと王妃との関係に関する研究は私にわずかながらの驚きをもたらしました。多くのハンガリー人と同じく、私は王妃陛下とデアークとの間に政治的蜜月関係があったという妄想の中に生きていました。しかし、今これはありえないことだと思います。伝記の

22) Vocelka (2014), S. 54.

23) Vocelka (2014), S. 55-57.

24) ハーマン(2005)、上、pp. 309-310.

中にはこれについて何も書かれておりません。私は歴史に詳しい人たちとも話しましたが、彼らもこのデアークの伝説をおとぎ話だと呼んでいました。ただし、デアークの政策に有利になるように皇妃が皇帝に強く働きかけたと主張されていました。その証拠はどこにも見つけられませんでした。そもそも、ハンガリーの政治における王妃の政治的影響力について非常に多くの伝説があるようです。例えば、エートヴェーシュの二つの伝記（一つは非常に正確な歴史家フェレンツイのものです）を読み通しましたが、王妃陛下については全く書かれておりませんでした²⁵⁾。

この手紙からデアークとエリーザベトとの直接的なつながりを示す手がかりはほとんどないことがわかるだろう。マイアーによると、デアークもエリーザベトも書簡の多くを隠滅しているため、ヤードキニマドチャーニが史料を見つけられなかったこと自体は不思議ではない²⁶⁾。関係性があつたかどうかについて歴史学的には検証できないが、多くの人々がデアークとエリーザベトの関係を疑いなく信じていたことはわかる。そしてハンガリーではエリーザベトがアウスグライヒ締結に影響力を持っていたという神話化が同時代に始まっていた。1867年6月16日付のハンガリー語新聞『日曜新聞』^{ヴァンナールナビ・ユンナーク}では、次のような記事が掲載された。

そうなのだ。私たちの王妃陛下が最初から私たちの祖国の運命に対してどれほど深い関心と愛情を抱いていたか、私たちの不運の重さをどれほど深く感じていたか、数百万の国民を喜ばせる喜ばしい転換〔アウスグライヒ〕の手段となるように、夫の心にどれほど影響力を行使していたかは、秘密ではないのだ²⁷⁾。

25) Meyer (2019), S. 146.

26) 同上

27) Meyer (2019), S. 150-151 より引用。

多くのハンガリー人がエリーザベトをハンガリーの守護者と見なしていたことは間違いない。しかし、歴史家にはこれ以上の立証は難しい。ハンガリーの歴史家エーヴァ・ショモジィは『ハンガリー王妃』(*a királyné magyarországon*)の中で次のように述べた。

最終的に多くの要因がアウスグライヒへと導いた。その発端と結果、それがよかったのか、君主国を破滅させたのか、関係者や後世の人々は今日に至るまで様々に判断してきた。しかし、神話は残った。神話を証明する必要は無いが、反証することもできない。美しく、繊細で知的な女性の神話は残ったのだ²⁸⁾。

最後にアウスグライヒとエリーザベトに関してヴォツェルカの伝記を引こう。

国民問題の解決は、格段に困難だった。このことは、憲法制定の試みがすべてこの問題で最終的に挫折してきたことからもすでに明らかだった。今日、振りかえてみると、広大な君主国を連邦化し、すべての国民を実質的に（机上ではすでに「同権」であったが）この政治システムに完全に統合するほうが国家生き残りにチャンスを提供したはずだと簡単に言えるだろう。しかし、フランツ＝ヨーゼフとウィーン宮廷は、そこまで先に進むことは許されず、たった一つの国民にしか特権を与えられないという意見だった。皇妃の影響力や意志とは無関係に、ハンガリー支持には二つの重要な論拠があった。他の国民とは異なり、マジャール人はハプスブルク家から見ると常に反抗的で危険な存在だと映っていた。1526年以來のハンガリーとハプスブルク家の関係の歴史全体が王朝に対する貴族の闘争で貫かれており、ハンガリー人は他の国民よりも恐れられ、なだめて平和をもたらすことが試みられてきた。他方で、君主国のスラヴ国民（ルテニア

28) Meyer (2019), S. 171 より引用。

人あるいはウクライナ人、ポーランド人、チェコ人、スロヴァキア人、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人)は統一的な集団ではなかった。とくにロシアに支援されたパン・スラヴ主義の存在が背景にあったので、他のものを含めずにこうした中から一つの国民集団だけを参加させることは難しかった。したがって、エリーザベトを崇拜する人たちにとっては幻滅するような話だが、彼女がいなくてもハンガリーとのアウスグライヒかマジャール人の反乱しか選択肢がなかったのだと考えられる。しかし夫に対するシシィの影響力がこのプロセスを容易にし、ひょっとすると緩和したということは確かである²⁹⁾。

歴史家に言えることは、ハンガリー問題に関してエリーザベトは夫に干渉し、ある程度アウスグライヒ交渉を円滑化したが、決定的な役割を担っていたとは言いがたいということだろう。ただし、1867年のアウスグライヒと戴冠式は、フランツ＝ヨーゼフとエリーザベトをハンガリーの国王と王妃とし、ハンガリーにおける忠誠心の転換に大きく関わっている³⁰⁾。事実はどうであれ、ハンガリー人にとって、アウスグライヒまでの道のりでエリーザベトが決定的な役割を担ったように見えたことは重要である。ハプスブルク王家がエリーザベトを通じてハンガリー人の忠誠をある程度集めることを可能にしたからである。

おわりに

本稿では歴史におけるエリーザベト像を検討してきた。その結果、記録の不在と存命中から始まった神話化の一端が明らかになった。エリーザベトに関する虚像と実像は、峻別しがたい形で混在していることがわかる。記録の消失に

29) Vocolka (2014), S. 60–61.

30) Freifeld (2007), p. 152. フライフェルトは、歴史家の間で、エリーザベトの行動を直視しないことが1867年の戴冠式とアウスグライヒ、二重君主制の重要性の過小評価が関連していると指摘する。

よって忘れ去られた過去は、集団的記憶によって補完的に再構築され、創られた過去は、現代におけるエリーザベトのイメージを形成する映画やミュージカルなどの映像作品やメディアに影響を与えている。史料の欠如が想像を促進し、エンターテインメント作品の制作を容易なものにしている。エリーザベトの複雑で多様な人物像は、観察者にとって投影スクリーンの役割を果たし、特定の側面を強調することで、都合のよい解釈を導きやすい素材ともなる。歴史学としては、エリーザベトを脱神話化する努力が必要であるが、物語やフィクションとしての作品は、史実とは区別して楽しむものである。そうした意味で、ミュージカル作品「エリザベト」が初演から30周年を迎え、日本でも人気を集めていることはハプスブルクの歴史を専門とする歴史家にとっても好ましいことだと考えている。

最後に、歴史学におけるエリーザベト研究の可能性に触れておきたい。ジェンダー史やハンガリー史においてエリーザベトの表象のされ方をテーマに新たな論点も提示されつつある。史料的にエリーザベトの行動を明らかにすることが不可能な以上、外からどのようにイメージされていたのかに焦点を当てることは、的外れではあるまい。そうしたイメージのあり方を王朝のメディア戦略の中に位置づけることができれば、ハプスブルク君主国の歴史に十分寄与できるテーマになるだろう。歴史家が触れにくいテーマであることは確かだが、今後、歴史学の方面でも学術的研究が進むことを願っている。